

原爆文学「古典」再読1——井伏鱒二『黒い雨』報告

中野和典

本特集では二〇一四年八月三日（日）に名古屋大学で開催したワークショップの成果を報告する。このワークショップは「戦後70年」という一つの節目に向けて企画した連続ワークショップの第一弾である。

読書会のような形で一つのテキストについて議論する場を設けてほしい、という声は数年前から研究会の事務局に寄せられていた。近年、原爆文学研究会の会員数は増え、それぞれの関心も広域化しているので、あえて一つのテキストを選び、それについて研究分野の枠を越えて語り合う時間も作った方がよいという考えにもとづく要望であった。この度「戦後70年」を迎えるにあたり、「原爆文学」の「古典」を再読することには意義があるだろうという判断から連続企画の一つとして実施することになった。

何が「原爆文学」の「古典」なのか、その条件を厳密に示すことは難しいが、長く読みつがれているテキストは確かに存在している。それらはなぜ現在にいたるまで読みつがれてきたのか、また、それらは「戦後70年」を超えて読みついでいくべきどのような

な可能性を持つているのか。これがこの連続企画を貫く大きな関心である。

今回は、同日に開催したもうひとつのワークショップ「原爆体験の〈表現〉と〈運動〉——60・70年代を中心に」との関わりも考えて、井伏鱒二『黒い雨』（新潮社、一九六六・一〇）をテキストに選んだ。まず司会の中野和典が『黒い雨』の受容史を同時代評から二〇一〇年代にわたって概観し、次に発題者の齋藤一が『黒い雨』とその主な原典の一つである『重松日記』との関わりから問題提起を行い、さらにもう一人の発題者の中谷いづみが『黒い雨』における「庶民」の表象とテキストの成立時期における社会的な出来事や言説との関わりから問題提起を行った上で、議論の場を会場全体に開いた。

この特集では三人の登壇者の発言記録を当日の発言順に掲載するが、その詳細はそれぞれご覧いただくとして、この「報告」では全体討論でのやりとりをいくつか要約して紹介したい。まず話題になったのは『黒い雨』の時間認識に対する疑問で



あった。(終戦後四年十箇月目)(第一章)や(あと三日で新暦では八月六日)(第19章)といった記述から、『黒い雨』の「現在」は一九五〇年の六月から八月と推定できるが、その時起きていた朝鮮戦争や『黒い雨』成立時に起きていたベトナム戦争について全く語られていないのはなぜなのか、という問題である。これに対しては、井伏の自作解説によれば直接的には書いていないが、ベトナム戦争については意識しつつ書いたと語られているという応答があった。また(八月中旬)(第17章)という記述は(あと三日で新暦では八月六日)という記述と矛盾するのではないか、という疑問も出た。これに対しては『黒い雨』に時間的な錯誤があることがすでに指摘されているという応答があった。

次に話題になったのは『さざなみ軍記』(河出書房、一九三八・四)などに見られる日記体の採用や破壊の直前までを描く構成法と『黒い雨』との類似性をどう考えるかという問題である。これに対しては、典拠を一回書き直すのではなく、それ自体が何度も書き直されている『重松日記』を典拠にして、さらに日記を書き直す(清書する)ところが『黒い雨』の特質であり、興味深い点であるという応答や、井伏鱒二の小説の典拠を示した上でそれらを「男性性の文学」として位置づける中村光夫の井伏鱒二論(『現代作家論』新潮社、一九五八・一)があるという応答があった。

これを引き継ぐ形で話題になったのは『黒い雨』における女性性と男性性の問題である。『重松日記』では女性の強さが強調されているのに対して『黒い雨』ではそれが捨象されていわゆる「原爆乙女」としての矢須子に焦点が当てられているという女性の描き方の違いがあるのではないか。その一方で、重松が「去勢され



発題 齋藤一

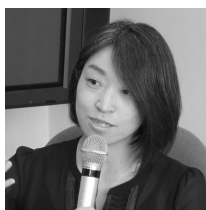
「家長」と「去勢された日本」を同列化することは、日本がベトナム戦争のときに米国を支持していたことや重要なアジア戦略の一員として自由主義陣営の中に入っていたことを無視して「被害者としての日本人」というイメージを印象づけることになってしまふので、妥当とは言えないと思うという応答や、確かに『重松日記』の演説による士気高揚のエピソードは米国との関係だけではなく、女性の描かれ方という観点から見ても『黒い雨』には採り入れづらかったのだらうという応答があった。

次に話題になったのは、かつて豊田清史を中心に『黒い雨』が『重松日記』の盗作であるという批判があったが、その後どのようになつていのかという問題である。これに対してはその後、猪瀬直樹も加わって盗作であるという糾弾があったが、さまざまな違いも指摘されており、『黒い雨』を盗作とは位置づけられない見方が定着しているようであるという応答があった。



司会 中野和典

「家長」として描かれていることは戦後の日本におけるジェンダー意識を反映しているのか、さらに言えば、米国に対する日本のイメージにつながっていると考えてよいのかという疑問が出された。これに対しては「去勢された



発題 中谷いづみ

「家長」として描かれていることは戦後の日本におけるジェンダー意識を反映しているのかという問題であった。これに対しては、体験していない人間が書いたものも「原爆文学」とする見方は意外と早くからあったようだという応答や、良いか悪いかは別として戦争体験と被爆体験があまりにも連続性がある形で語られて来たので、その点が「在日朝鮮人文学」との違いを生み出しているのかもしれないという応答があった。